様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０１００

研究課題名（和文）メディア・イヴェントのなかのジャポニズム・オペラ

研究課題名（英文）Japonism Opera as Media Event

研究代表者
長木　誠司（CHOKI, Seiji）

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号：５０２９２８４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：19世紀後半から20世紀末までに作曲された「ジャポニズム・オペラ」の系譜をたどり、そこで描かれている「日本像」「日本人像」が、いかなるルーツや作品間のインターテクスチュアルな関係の上に成立しているかを、台本・音楽・ドラマトゥルギーの視点から分析すると同時に、「日本」および「東洋」という題材が、この期間の西欧オペラ創作のなかでどのような新たな発想を与えていたのかを検討した。

研究成果の概要（英文）：By means of surveying the short history of "Japonism Operas" mainly composed in the 19th and 20th centuries and analyzing them from the viewpoint of intertextuality, I investigated how "Japan" and "Japaneses" there have been represented in music, librettos and dramaturgy. It is also discussed which new concepts or ways of expression this representation of Japan and also Asia gave to the composing of modern operas.

研究分野：音楽学・表象文化論

キーワード：オペラ　ジャポニズム

１．研究開始当初の背景

本研究では、19 世紀後半から 20 世紀末までに作曲された「ジャポニズム・オペラ」の系譜をたどり、そこで描かれている「日本像」「日本人像」が、いかなるルーツや作品間のインターテクスチュアルな関係の上に成立しているかを、台本・音楽・ドラマトゥルギーの視点から分析すると同時に、「日本」および「東洋」という題材が、この期間の西欧オペラ創作のなかでどのような新たな発想を与えていたのかを検討しようとした。単に作品創作上の問題ではなく、植民地主義のなかでの国家間のパワーポリティクスが反映されており、その時代的変遷と東洋との文化触変、および芸術音楽だけではなく大衆音楽や文学・絵画等における日本（人）像、東洋（人）像も密接に関わっており、それらの総合的・相互的連関のなかで、「ジャポニズム・オペラ」の現代像を新たに構築することが必要だと考えられた。

２．研究の目的

本研究はが目指したのは、「オペラ」という、いまや総合「芸術」になってしまったジャンルが、本来どのような大衆的興味と大衆の娯楽との相互連関によって成り立つものであったか、ということの解明と、オペラ史、あるいはオペラ研究自体の再検討である。19 世紀のワグネリズム、およびそれと同時代に成立した「作品」中心主義をベースにした音楽学という学問のなかで、オペラは交響曲などを中心にする器楽作品などと同等の自律的「作品」として、その構造や歴史について言及され、研究されてきた。しかしながら、こうした「作品」中心主義的な研究は、オペラというものの「芸術性」に重きを置くがゆえに、このジャンルの本来の性格、すなわち、芸能的であり、もっと大衆寄りである性格、さらに言えば、広く社会のなかに根付けるような「歌芝居」としての側面を歪めてしまい、そのあり方や歴史そのものへの窮屈で偏った展望を与えてしまったのではないか、というのが申請者の根源的な疑問であった。

オペラの最盛期であった 19 世紀において、このジャンルが「歌劇場」という特定の空間を越えて、イタリアのような一国家である国民文化になり得たのは、歌劇場に通う上・中流市民以外に、例えば、オペラのアリアがゴンドラ挽きが歌うような大衆歌のレヴェルにも普及して、労働者階級のようなより幅広い層に受け容れられていたからである。いわばオペラは、芸術音楽と大衆音楽を取り結ぶ位置づけの上で、そのダイナミクスを糧としながら西欧の劇場文化の頂点に立ちながらも国民文化としての普遍性を持っていた。

そうしたオペラ文化の拡がり方を具体的に示すことは、例えばヴァーグナー流の「総合芸術」として、エリート化していくオペラ文化とは異なった視点でこのジャンルを再検討することにつながる。20 世紀オペラの基盤をなすのはポスト・ヴァーグナー的な視点であると従来考えられてきたが、果たして本当にそうなのか。オペラ史には、もう少し別の記述方法があるのではないか？本研究の背景には、以上のような、オペラ史そのものの再検討という意図があった。

３．研究の方法

以上の大枠の研究目的と課題、そしてその解明にいたるために、本研究は第一歩として、まさにワグネリズムが始まった時代、すなわちヴァーグナーの同時代に書かれ始める「ジャポニズム・オペラ」

の創作と普及のメカニズム、現代像を検証することを課題とした。大枠の目的の端緒として、日本のわれわれにとって身近なオペラ作品の系譜をテーマとするわけである。「作品」中心主義が芽生え始めた時代、まさにオペラにもそれが適応され始めた時代にあっても、本来のオペラのあり方はけっして変化していなかったし、20 世紀にいたるまでその本質的な構造は変わっていないのだということを検証することで、ワグネリズムに発するオペラ研究やオペラ史の記述がある特定の見方に捕らわれすぎているということを具体的に示すことが、大きな目的であった。

もちろん、それを示すためには、「ジャポニズム・オペラ」の実態や、現代像を正確に捉え直すことが必要で、初演から芝居小屋や歌劇場にかけられてきたそうした作品の、作品としての内実や上演形態、上演史をつぶさに調査することは当然として、それらの上演を支える劇場機能や人的な連関をこまめに調べ上げることも必要である。

また、いわゆる西欧の「植民地主義」のなかで成立してきた「ジャポニズム・オペラ」は、18 世紀以来の長いスパンのなかでは、オリエンタリズムという枠内にも所属する。それは、19 世紀から 20 世紀にかけの国際関係や政治力学の変化のなかで、題材やドラマの展開法（ドラマトゥルギー）に変化を見せており、そうした変化はオペラ作品そのものに現れていると同時に、その上演と受容の仕方、すなわち政治的な利用や大衆文化との接合の仕方にも影響を与えている。換言すれば、ひとつのオペラ「作品」を成立させる構造と、それが成立したあとに、それを受容し関連しながら成立してくるさまざまな文化現象――それはいわゆる「芸術音楽」の枠を越えて広がる現象であるが――があり、それらがまたもともとのオペラ作品の受容や上演形態にフィードバックされていく様子があるのである。

以上の理由から、本研究はオペラ作品そのものの研究に留まらずに、こうした作品の成立と受容とフィードバックというダイナミクスのなかで、オペラが変容していくさまを具体的に検証することによって、「作品」というエリート文化、芸術音楽の対象として見なされてきたオペラの捉え方そのものに風穴を開けようとした。

「ジャポニズム・オペラ」は、ワグネリズムと同時代に発しているだけではなく、そこには東洋に対する西欧の視線が端的に表れていると見なしうる点で、上記の研究には適切な対象であり、また作品構造そのものだけではなく、いわゆる「芸術的」な目的以外の利用のされ方、上演や受容のされ方が、比較的捉えやすい。さらには、「ジャポニズム・オペラ」と同時期に作曲されている、例えば中国やほかのアジア地域を題材にするオペラとの比較研究も可能であるという点も、この下位ジャンルを上記の大枠の研究目的への端緒としてテーマにする理由であった。

これらのオペラには、西欧が東洋を見つめる視線と、東洋がそのオペラを受容しながら西欧を見つめる視線が交差しており、それがオペラ「作品」という枠を越えて、さまざまな方法や派生的な現象を通して広く社会に浸透していく様子が相対的には捉えやすい。実際、それらはオペラを本質的な次元で成立させている要素であり、それを検証することが本研究の目的であった。

本研究の中心は、作品に関する調査研

究と、その背景となる歴史的・社会的状況の省察、そして各作品を生み出す文化状況、作品が生み出した文化状況、そしてさらにはそれらがオペラ作品の上演にフィードバックされていく状況を明確化する作業となった。また、その作業のなかで、それぞれの作品そのものと、作品が生み出した状況同士の間にあるインターテクスト的な連関を明らかにすることも大きな課題であった。「ジャポニスム・オペラ」は、各作品が単体として存在しているわけではなく、その上演と国を越えた普及のなかで、互いに先行する作品のなかでの日本への視点・視線棟を共有しながら成立しているからである。従来、こうしたことは中心的なテーマとして明確に研究されてこなかったが、本研究は「ジャポニズム・オペラ」の枠を越えた、将来的にはオペラ・ジャンルそのものの研究へと広がっていくはずである。

４．研究成果

プッチーニの有名な《蝶々夫人》のなかで描かれている「日本」像は、そこで初めて登場したものではなく、先行する《ミカド》や《ザ・芸者》といった作品のなかで描かれている要素を採り入れ、場合によっては「盗用」して応用し、あるいはステロタイプ的に受け継いだパッチワークという色彩が強い。そうしたパッチワークから見えてくるのは、新たな日本像ではあるものの、それはその時代の一般的な日本表象とどのような関係があるか、それは解釈の必要となる部分である。こうした「インターテクスト」的な関係は、オペラが実際に上演される歌劇場のレパートリーと、歌劇場というシステム、そしてそこから広がる二次的なイヴェントのなかで機能して成立することなのであり、そのメカニズムを明らかにすることによって、オペラの創作や、その歴史を他の音楽ジャンルとは異なった視点、オペラの独自の視点で追うことになった。このインターテクスト性は、単にオペラという範囲を超えて、他の音楽作品、それも芸術音楽だけではない流行歌などとの間にも成立しており、同時に文学作品・絵画作品との連携も生じている。それらについても、上演劇場や作曲家のアルヒーフを調査しつつ、先行研究や他ジャンルの研究を活かして、相互連関的な状況を調査した。

まず「ジャポニズム・オペラ」の範囲確定と、それらのうち対象となる諸作品の分析的な調査を行うとともに、作品と時代をまず 19 世紀に限って、各作品、およびそれらの背景となる社会文化等々、関連事象の調査を行った。

既存のデータベースを利用して、19 世紀から 20 世紀末までの間の「ジャポニズム・オペラ」の領域確定を行った。オペラ研究者ジョン・ロッセッリやフィリップ・ゴセットが明らかにしているように、オペラ作品は、残っていないものの数の方が、現在知られて上演されている作品の数を大きく上回っており、残されたものだけを調べてもその創作史の実態を調べたことにはならない。それゆえ、近年になって進んでいる作品のデータベースを有効に活用して調査した。この際、ことに楽譜は残っていない作品も、残された印刷台本が手助けとなった。近年、飛躍的に進んでいるオペラ台本研究が有力な助けとなった。

19 世紀に上演史のある作品について、台本を音楽面、そしてテクストの単語やプロット単位でデータベース化し、比較と対照の上で、相互連関の可能性を統計的に割り出していった。その際、プロットやドラマトゥルギー構成の抽出には文

学作品における既存の物語論を援用しながら作業を行った。台本分析は、似たような話の多いオペラというジャンルにおいて、近年分析方法として有効に採り入れられているものであり、その成果を踏まえつつの作業であった。

作品の成立した劇場を取り巻く政治的・文化的な脈絡も調査を行った。例えば、サリヴァンの《ミカド》の成立には、ロンドンのミュージカルシアターのレパートリーのなかで、この作品がどのような類型的作品として成立しているのかということか重要であり、「ジャポニズム・オペラ」同士の比較ではなく、劇場上演という文脈のなかでの位置づけが不可欠であったため、ロイヤル・アカデミーでの資料調査や、ロンドンの劇場の調査を実地に行った。

日本の「娘」概念は西洋女性にない要素としてオペラに初めて登場するが、そのドラマ上のキャラクター比較などがひとつの視点となった。描かれている日本像の成立には、当時の日本文化の紹介（万博や「日本人村」）と浸透度（メディアにおける紹介）などだけではなく、政治的な意図性が関わっている。異国情緒として面白がられている段階から、日本という国家の近代化やアジア世界への進出プロセスとともに日本像が変化していくなかで、オペラにおける日本像も着実に変化した。この変化が、単に個別の作品に偶有的なものなのか、あるいはなんらかの脈絡に沿ったものなのかということを探り当てるために、単にオペラだけではなく、その成立周辺に生じている一般的な日本像を、政治史、メディアでの扱い、文学や絵画といった他の芸術ジャンルの調査のなかで解釈する作業を行った。

その際に有効な手だてのなるのがインターテクスト性であった。あるプロットや音楽部分の引用元、応用の起源などを、他ジャンルのジャポニズム研究の成果を踏まえながら追跡する。《ザ・芸者》における「芸者」の表象は、「娘」小説の流行など、先行する特定の文学作品や図像に起源を求めることはできるが、同時にそれらから派生した別の文化現象からの間接的な影響も指摘されねばならない。本研究では、対象とするオペラを「ジャポニズム」にまつわる何らかの主題のまわりに広がった一種の「メディア・イヴェント」として捉え、総合的な文化現象としてオペラの歴史を考えた。本研究はこうした「メディア・イヴェント」性が、オペラの継続的な発展と創作史にとって本質的と言えるということを指摘しようとするものであるが、それはようやく端緒に就いた研究とも言えるだろう。

具体的な方法としては、作品成立期周辺の新聞や雑誌記事、および文学作品、絵画（美術）作品から、日本を扱った事例を拾い、影響関係を測った。《ザ・芸者》など、初演地ロンドンを越えて、むしろドイツで広く人気を誇った作品は、ベルリンの新聞・雑誌資料館での調査が有効であった。

20 世紀のオペラとしては、《蝶々夫人》や《寺子屋・犠牲》といった、「ジャポニズム・オペラ」の最終的な形態を、同様の作法で調査・研究した。新たな研究方法になったのは、日本においてこうした作品が（ステロタイプ的な日本像や、数々の「誤解」に対する日本人からの嫌悪にもかかわらず）頻繁に上演されているという現象を、国民性のアイデンティティ形成とオペラ創作・上演の連関という視点から分析することであった。それは、西欧の視線を逆手にとってひとつの流行や文化現象を作る、オペラの極めてしたたかな側面であり、それこそこのブルジ

ョア的なジャンルを 20 世紀においても継続させている大きな源となっていた。

《蝶々夫人》を巡る本国イタリアでのメディア・イヴェントについて、残念ながら出版社リコルディのアルヒーフをいまひとつ活用できなかったのが残念であるが、その代わりに日本における同様のメディア・イヴェントを、数多く作られた流行歌やミュージカルのような二次的な舞台化、映画化などの分野において調査し、それらのオペラへのフィードバック現象を跡づけることができた。オペラで描かれているマダム・バタフライ像は、昭和初期に 20 以上の流行歌になっており、それはこのオペラ作品上演の人気に大いに関与し、作品のポピュラー化に寄与して、劇場に足を運ぶ人間の飛躍的増大を促したことが了解された。こうした事情をレコード会社の思惑や実際の流行現象の追跡によって調査することこそが、オペラ作品の実際の姿を論じることにつながると考えられたからである。

以上、当初の目標としたことは、大部分において達成されたと考えている。今後は、今回の不足分を継続的に調査・研究する必用があると考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

①長木誠司「ディスク遊歩人 : 音盤街そぞろ歩き(78)二人はライヴァル?」レコード芸術 64(6), 68-72, 2015-06　査読なし

②長木誠司「ディスク遊歩人 : 音盤街そぞろ歩き(69)プッチーニ : 狭間の寵児のふたりのライヴァル」レコード芸術 63(9), 78-82, 2014-09　査読なし

③長木誠司「ディスク遊歩人 : 音盤街そぞろ歩き(62)オペラになった大統領(承前)」レコード芸術 63(2), 62-66, 2014-02　査読なし

④長木誠司「ディスク遊歩人 : 音盤街そぞろ歩き(61)オペラになった大統領」レコード芸術 63(1), 62-66, 2014-01　査読なし

⑤長木誠司「バイロイト音楽祭報告 二〇一二 電脳世界のオランダ人」、『ワーグナーシュンポシオン = Wagner symposion』, 123-130, 2013　査読あり

⑥長木誠司「ディスク遊歩人 : 音盤街そぞろ歩き(57)暑い折のコロンブス」レコード芸術 62(9), 78-82, 2013-09　査読なし

〔図書〕（計１件）

①長木誠司『オペラの 20 世紀　夢のまた夢』（平凡社、2015）　総ページ数：813 ページ

６．研究組織
(1)研究代表者　長木 誠司
（CHOKI, Seiji）
東京大学大学院総合文化研究科教授
研究者番号：50292842